

初島住彦(1906. 9. 11 2008. 1. 22) 先生の業績と思い出

著者	細山田 三郎
著者別表示	Hosoyamada Saburo
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	56
号	1
ページ	45-46
発行年	2008-09-30
URL	http://doi.org/10.24517/00053389

細山田三郎：初島住彦（1906. 9. 11 – 2008. 1. 22）先生の業績と思い出

Saburo Hosoyamada : Achievement and memories of the late Dr. Sumihiko Hatusima (1906. 9. 11 – 2008. 1. 22)

初島住彦先生は本年（2008年）1月22日お亡くなりになった。1906年9月11日長崎県島原市のお生まれの先生は、享年百一歳であった。謹んで哀悼の意を捧げる。

先生は1931年3月九州帝国大学農学部林学科を卒業、同大学農学部助手、講師、助教授、戦時中は1942年11月から陸軍司政官としてジャワのボゴール植物園勤務、第二次大戦後1946年10月九州帝国大学農学部附属演習林業務を嘱託、1948年4月鹿児島農林専門学校（現鹿児島大学農学部）教授で赴任、1972年3月定年退官に至るまで約25年間の長きにわたり、植物分類学の研究に没頭された。この功績に対し、鹿児島大学から1972年4月鹿児島大学名誉教授の称号を授与された。先生は鹿児島大学を定年退官後、琉球大学理工学部教授に赴任、退官に至る3年間琉球諸島の植物について精力的に研究を進められた。琉球大学退官後帰鹿し、鹿児島県植物相の研究、鹿児島植物同好会の指導、九州合同植物観察会の指導など、明解な植物の同定と広い知識を地域住民と研究者に惜しみなく提供された。植物の同定をお願いすると、驚くほど早く親切な返事をいただいた。小中学生の夏休みの宿題、植物標本「名付け会」は毎年とても楽しみにされ、九十九歳の夏までお元気で参加された。先生は研究において優れた業績を残された。1942年2月、ツゲ科植物の分類学的研究により農学博士の学位を取得された。また、海外においてはミクロネシア、ニューギニア、パターン列島における植物の調査研究においても貴重な業績を残された。鹿児島大学在職中は、九州南部から南西諸島の植物の解明に努力された。その間多くの新発見があり、発見者の初島先生の名を冠する植物に、南九州にのみ分布しているハツシマランや、徳之島北部の一部にのみ分布しているハツシマカンアオイがある。新種や新変種として学会に発表した植物は八十種類を超えている。先生が中心となって採集・蒐集された十万点を超える九州南部や奄美、沖縄などの植物標本は、「初島コレクション」として名高く、鹿児島大学総合研究博物館の目玉となっている。

先生は多くの著書を出しておられる。1971年「琉球植物誌」は、奄美群島以南の琉球列島に産する植物を記録したもので、南西諸島域の植物研究には重要な文献であり、1976年「日本の樹木」を著し、さらに1978年「鹿児島県植物目録」初版、1986年「改訂鹿児島県植物目録」、1991年種子島、屋久島、トカラ列島の植物をまとめた「北琉球の植物」、1994年天野鉄夫氏との共著で奄美以南の琉球列島の植物をまとめた「増補改訂琉球植物目録」など地域の植物目録を多数出版されている。それらは地域の植物を研究する上でとても便利で、多くの人から高く評価されている。2004年には「九州植物目録」を鹿児島大学総合研究博物館の研究報告第1号として著した。この目録は、97歳という高齢になってまとめられ、九州本土のほか、対馬から奄美群島までの各島に分布するシダ植物と種子植物を網羅し、植物の種と分布に関する記述をした大作である。将来にわたって分類・地理学的研究を行う研究者にとって欠かすことが出来ない内容となっている。これらの業績は、日本はもとより、海外でも高く評価され、1965年「西日本文化賞」、1996年「松下幸之助花の万博記念賞」、2002年「南日本文化賞」を受賞された。

さて、植物地理・分類学会との関わりは、私

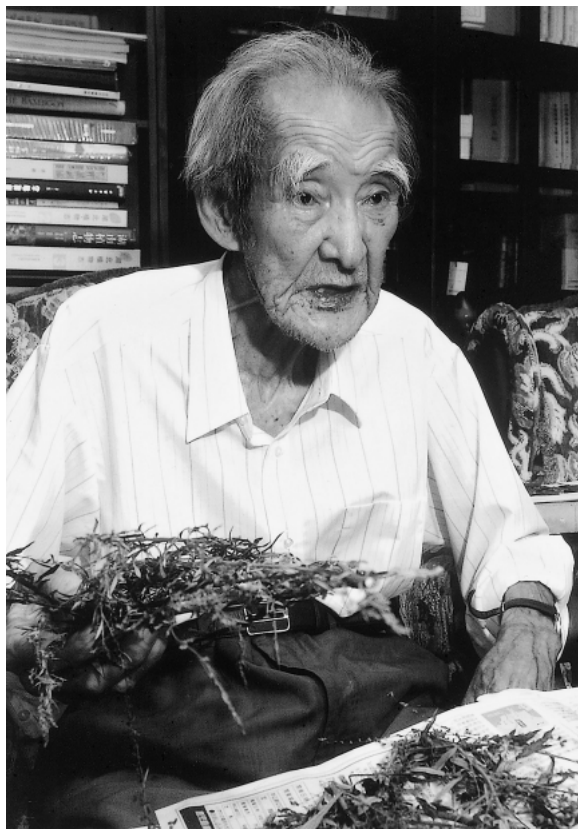


Fig. 1. Dr. Sumihiko Hatusima. Birthday of 100 years old on September 11, 2006. His photograph in his home taken by Minami-nippon Shinbun cameraman.

が福岡植物友の会例会(1999年1月13日~17日、北ボルネオ、マレーシアのサバ州に聳えるキナバル山 4,095 m)に参加することになった時、この事を初島先生にお話しすると、直ちに「キナバル山の植物」の本を貸していただいた。とてもすばらしい本で、先生に「私もこの本が欲しい」と言った。すると、植物地理・分類学会の前会長鳴橋直弘先生を紹介して下さった。早速、鳴橋先生にこの本のことを相談すると、先生から本が送ってきた。とても嬉しかった。それ以降、先生から「キイチゴ属」のことを多く学ぶことができたと共に、この本の著者である佐藤 卓先生にも大変お世話になった。

初島先生との思い出は、私が農学部林学科の専門課程に入り2年生後期講義で造林学を受講するようになった時からである。講義は毎回ノートをとることで終始し、3年生の樹木学実験でようやく植物分類の方法を教わった。4年生になると卒業論文を決めるため先生の教室を専攻し、テーマは「南限地帯におけるブナ林について」で、鹿児島県北部に所在する紫尾山の植生を調査することであった。日頃口数の少ない先生だったが、指導はとてもわかりやすく丁寧であった。1961年鹿児島大学教育学部に勤務することになり、早速先生のところに挨拶に行くといきなり、「鹿児島植物同好会に入会してくれ」と誘われた。それ以来、2007年12月の例会で509回を重ね、その間先生が例会に行かれる時は私の車の助手席に乗り、途中珍しい植物が目にとまると駐車禁止の場所でも「車を止めてくれ」と言われた。ふりかえると、2006年9月11日に先生が百歳を迎えられ (Fig.1), 9月17日に記念祝賀会を開催した。当日は台風13号が接近して心配だったが、静岡、京都、福岡、熊本、大分からの出席者もあり、無事開催でき先生はとても喜ばれた。先生が89歳の時「松下幸之助花の万博記念賞」を受賞され、お祝をした時「次は90歳のお祝いをしましょう」とお話しすると、「僕は百歳まで生きるのですその時にしてくれ」と言われた経緯があった。96歳で南日本文化賞受賞祝賀会、99歳で白寿のお祝いを佐賀県開催の九州合同植物観察会時にした。

九十歳を過ぎてから先生は、中国から入ってきた外来種のヨモギ類を研究されていた。道路、崩壊地、地面緑化用の種子に紛れ込んで、鹿児島県にも30種あまりのヨモギが入ってきている。在来種との交雑を心配され、本年中にまとめて同好会誌に発表される予定であったが実現できず残念である。2007年11月の同好会観察会でヨモギを5種類採集し、翌日標本持参で先生宅を訪ねた。同定をお願いしたが、後日来てくれとの返事だったので二週間後先生宅に行くと、ヨモギは1種同定されて *Artemisia mongolica* Fisch. ex Besser が学名で和名はついてなく、他の4種類は同定中とのことだった。2007年12月の観察会は、久しぶりに桜島に行き園山池でウラギク、チャボイ、タケコケモドキ (*Bostrychia flagellifera* Post フジマツモ科コケモドキ属の海藻の一種) を観察し、帰路オオヤグルマシダを見つけるため湯之に向かった。場所を探していると、60歳前後の地元の男性に出会い、その場所を教えてもらった。その日は入山しないで日を改めて挑戦した。風穴と称する溶岩に囲まれた凹地に生育しているオオヤグルマシダを見つけた。40数年来の念願のシダに出会うことができ感慨無量だった。デジカメに証拠写真を撮り一枚だけ葉をとり、翌日先生宅を訪ねた。先生はとても喜ばれその笑顔が今でも忘れられない。そして「サクラジマイノデは見つからなかったか」と尋ねられたので私はびっくりした。「次に行ったとき探してくれ」と話され、これが先生からの最後の宿題となった。ところが今年(2008)に入り桜島・昭和火口が突然爆発し入山できるか心配である。先生とお会いした最後の日、年末年始を主治医の病院で過ごされ吉野の自宅に帰られる今年1月8日だった。とても喜んでおられ、「まだ元気で大丈夫だよ」と話されたが、体調を心配していた矢先の1月22日朝、先生の訃報の連絡を受けた。先生は「まだ頭はぼけていないから、植物の研究をもう少し続けたい。植物の世界は知りたいことが山ほどあるからね。」と、口癖のように話されていた。約束通り百歳を越えるまで元気で植物の研究を続けられ、私達を指導して下さい。吉野の自宅をお訪ねしたときはいつも植物標本の同定をされていて、その姿は誠にすばらしく、言葉で表現できない思いであった。このような偉大な先生をそばに持っていた我々は、とても幸せだった。有り難うございました。先生の長年にわたるご業績とご指導に敬意を表し、心よりご冥福をお祈りいたします。

なお、この追悼文は、植物研究雑誌に投稿したものに加筆した。

(〒890-0052 鹿児島市上之園町 10-2 Uenosonochō 10-2, Kagoshima 890-0052, Japan)